

デスカンファレンスを通して見えてきた今後の課題

B棟7階 ○井上 望 北川 好美

I. はじめに

当病棟ではターミナル期の患者が少なくな
い。私たち医療者は、日常的にターミナル期
の患者やその家族に看護を行う中で「死」と
向き合っている。昨年度の段階別看護研究よ
り、看護師が死亡直前期の患者やその家族と
関わる中で「悩み・後悔の思い」といった悲
観的な感情を多く抱えていることがわかった。
しかし、そういった個人の思いは日常業務の
忙しさの中で、それぞれ自身で整理され、気
持ちは切り替えられているのではないかと考
えられる。沼澤らは¹⁾「実際の症例の検討に
おいては、患者とかかわったスタッフたちが
それぞれに患者への思いを語るだけでも意味
は大きい。(中略)医療者のメンタルヘルスの
面からもデスケースカンファレンスは実施す
る意味がある。」と述べている。このことから、
今回私たちは、デスカンファレンスによる看
護師の心理面の変化を知る目的で調査を計画
したが、心理面の変化については明らかにで
きなかった。しかし、デスカンファレンスを
開催したことにより、今後の課題を見出すこ
とができたので報告する。

II. 病棟の概要

診療科：消化器・内分泌代謝内科

病床数：60床

病床稼働率：96.6% (平成21年4月
～11月)

年間平均死亡退院数：41.8件(平成16
年4月～平成21年3月)

勤務体制：2交替

看護職員数：28名 (師長・主任含む)

看護方式：固定チームナーシング、2チ
ーム制

III. 用語の定義

・デスカンファレンス：死亡退院後に開催
されるカンファレンスであり、患者の経過や
家族との関わりなどを振り返ることでグリー
フケアや看護を振り返る場。

IV. 活動内容・結果

デスカンファレンスを開催するにあたって、病棟勤務看護師22名を対象に患者選出を目的としたアンケート調査を行った。アンケート内容は、患者名、その患者との関わりのなかで悩んだことや後悔したこと、印象に残っている場面、そのときの思いや対処について自由記載とした(表1、回収率77%)。その中で名前の多く挙がった症例を各チームから1名ずつ選出した。

先行研究をもとに下記の表2を作成した。デスカンファレンス実施前に、症例、デスカンファレンスの定義、目的、進行について記載した用紙を配布し、各自目を通してから参加してもらうこととした。また、話しやすい雰囲気を作るためお茶会形式で行った。開催中は意見を記録しながら施行した。

表1 実施前アンケート結果

質問内容	はい	いいえ
ターミナル期の患者との関わりの中で、悩んだことや後悔したことはあるか	16人/17人	1人/17人

表2 デスカンファレンスの流れ

- ① 日時：平成21年12月1日
約60分間
- ② 司会者からカンファレンス開始のあいさつ
- ③ 症例提示
- ④ ディスカッション
 - ・患者に関わった中で悩んだことや後悔したことについて
 - ・患者に関わった中で良かったこと
- ⑤ まとめ
- ⑥ 司会者から終了のあいさつ

デスカンファレンス参加者(計10名)の内訳は、経験年数10年以上が2名、5年以上が3名、2~4年が1名、1年未満が4名であった。

表3 デスカンファレンスの内容

① 新人の思い	「今ならもう少しいろいろ考えてケアできたかもしれない」 「業務をこなすことで精一杯だった」 「ケアで状態が変化したらどうしよう」
② コミュニケーションに関する悩み・後悔	「どう声かけしたらいいか悩んだ」 「声かけに困った」 「もっと話を聞いたらよかった」
③ 緩和ケアチームの介入による効果	「患者と関わりやすくなった」 「会話の糸口が見つかった」
④ ケアに対する後悔	「患者とどう接したらいいかわからなかった」 「散歩の時間を作ってあげたかった」 「深い関わりができなかった」 「自分の表情が顔に出ていたかもしれない」
⑤ 家族との関わりでの悩み・後悔	「妻に何もしてあげられなかった」 「妻の気持ちが見えにくかった」 「医療者と家族との間に壁が感じられた」 「妻に対して時間をかけて話をしたらよかった」
⑥ 患者・家族からの感謝の言葉	「聞いてくれてありがとう」 「感謝の思いを家族は言っていた」
⑦ 自己の看護の良かった所	「患者が安心するような声かけを心がけた」 「家族をねぎらう声かけ」

デスカンファレンスでの内容を大きく分け

ると、表3のように「新人の思い」、「コミュニケーションに関する悩み・後悔」、「緩和ケアチームの介入による効果」、「ケアに対する後悔」、「家族との関わりでの悩み・後悔」、「患者・家族からの感謝の言葉」、「自己の看護の良かった所」などがあつた。

デスカンファレンス終了後にアンケートを実施した。アンケート内容は、悲観的な感情が軽減されたかどうかの二者択一の質問、良かった点、今後の改善点、継続の必要性について自由記載で行つた(表4、回収率100%)。良かった点についての自由記載では、「自分だけで悩んだり後悔していることをどこかで表出したかつたし、誰かに共感してもらいたかつたので参加して良かった」、「マイナスに思つていたケアでも、見方を変えたり他の看護師の意見でプラスへ切り替えられることがわかつた」、「看護の振り返りの場になつた」、「気が楽になつた」、「お茶会形式だったので話しやすい雰囲気だつた」などの意見があつた。自由記載の内容では「共感・共有できてよかつた」、「他の看護師の看護や思いがわかつた」、「自分の看護の振り返り、今後の目標を見いだせた」との意見があつた。

表4 実施後アンケート結果

質問内容	はい	いいえ
デスカンファレンス実施前後で悩みや後悔した思いは軽減されたか	9人/10人	1人/10人
今後デスカンファレンスは必要か	10人/10人	

V. 考察

今回のデスカンファレンスで、「もっと話を聞いてあげたかつた」、「どう接したら良いかわからなかつた」といったコミュニケーションやケアに関する悩み・後悔の意見があつた。

堀らは2)、「過去の喪の作業が整理されていない時、過去の未消化の葛藤が、頭をもたげ今現在向き合わなければならない患者様との適度な距離がたもてなくなる。」と述べている。看護師は患者の死後様々な思いを抱いたまま日々の業務をこなしていかなければならない。そのことが、看護の質の低下にもつながりかねない。これらの悩み・後悔の意見は、日々「死」と向き合う看護師が喪の作業の整理ができていない表れではないかと考えられる。その他に、「今ならもう少し様々なケアができたかもしれない」といった新人看護師特有の思いもあつた。現在、当病棟で各チームの小集団活動を通して、緩和ケアに取り組んでいるが、知識の獲得、伝達にとどまっておりのケアに活かしきれなかつたためこのような意見が出たとも考えられる。

また、参加者の多くが患者・家族とのコミュニケーション面での悩み・後悔を多く抱えていることがわかつた。小集団活動やチーム会活動を通して、より実践的な勉強会を実施していくことでカウンセリング技法の習得につなげ、患者・家族とのコミュニケーションでの悩みや後悔の思いの軽減を図っていく必要がある。

表4から、デスカンファレンスに参加した全員が、デスカンファレンスの継続の必要性を認識していた。しかし、今回の症例は死亡退院3カ月後の実施となっており、今後の改善点として「デスカンファレンスの時期の見直し」、「緩和ケアチームのアドバイザーの参加検討」、「症例数の検討」、「時間配分」などが挙げられた。

デスカンファレンス中での意見から、情報の共有、記録の充実を図る必要があると改めて感じた。ケアしていく中での悩みや、ケアの方向性の検討を充実していくためにも、日々のカンファレンス実施の重要性を感じた。しかし、日々の業務の中で十分なカンファレンスが実施できていない現状がある。短時間

で効果的なカンファレンスを行うための工夫として、情報共有シートの作成・活用を検討することが必要であると考え。また、記録の充実を図るため患者・家族から得た情報、それに対して行った看護などをもれることなく記録できるように、看護記録についても対策が必要であると考え。

今後、効果的なデスカンファレンスを行うため、今回行ったようなお茶会形式や時間配分、症例件数、進行の仕方、討議の視点など運営方法の規準を作成し、継続していく必要がある。

デスカンファレンスは、誰もが避けられない「死」という事実に向き合うことで、日常の業務の中で忘れがちな生命の尊厳や人権を大切にするという医療の原点を改めて確認できる場でもあることがわかった。今後、ターミナルカンファレンスやデスカンファレンスを定期的・継続的に行っていくことで、看護師の思いや意見の表出の場とし、討議することでより良い看護を提供していけるよう努力していきたいと考えている。

Ⅵ. 結論

- 1) 今回のデスカンファレンス参加者から「共感・共有できて良かった」、「他の看護師の看護や思いがわかった」、「自分の看護の振り返り、今後の目標を見出せた」などの意見が多かった。
- 2) 以下の今後の課題を見出せた。
 - (1) デスカンファレンスの運営規準を作成し継続していく。
 - (2) コミュニケーションやケアについての悩みを討議したり、患者や家族の思いなど、情報の共有を図ることを目的としたターミナルカンファレンスを実施していく。
 - (3) 小集団活動やターミナルカンファレンスを活用し、カウンセリング技法の習得に向けた、より実践的な勉

強会を行うことでケアにつなげていく。

【引用文献】

- 1) 沼澤佐代子・宮本佳代子・須藤礼子：医療者・患者家族の癒しにつながるデスカンファレンス，看護学雑誌，64(6) p 534，2000.
- 2) 堀夏樹・小澤桂子：一般病棟でできる緩和ケアQ&A，総合医学社，p 226，2006

【参考文献】

- 1) 沼澤佐代子・宮本佳代子・須藤礼子：医療者・患者家族の癒しにつながるデスカンファレンス，看護学雑誌，64(6) p 534～p 538，2000.
- 2) 内藤千春・中居靖：ターミナルケアにおけるデスカンファレンスの効果－POMSを利用したストレス軽減の評価－，第39回日本看護学会論文集(看護管理) p 330～p 332，2008
- 3) 関口正則・吉村紀代・古屋瑞穂：療養病床で行われるデスカンファレンスの記録を検討して見えてきたもの，第39回日本看護学会論文集(老年看護)，p 261～p 263，2008
- 4) 堀夏樹・小澤桂子：一般病棟でできる緩和ケアQ&A，総合医学社，p 224～p 227，2006